

傾城阿波の鳴門

順礼歌の段

へふるさとを、遙々こゝに、紀三井寺

「順礼に御報謝」と、言ふも優しき国訛。

「テモしおらしい順礼衆、ドレ／＼報謝進じよう」と、盆に白米の志

「アイ／＼、有がとうござります」と、言う物腰から棲外れ

「可愛らしい娘の子、定めて連れ衆は親御達、国はいづく」と尋ねられ

「アイ、国は阿波の徳島でござります」「何ぢや徳島、さつてもそれは、マア懐しい。わしが生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に順礼さんすのか」「イエ／＼、その父様や母様に逢いたさ故、それでわし一人、西国するのでござります」と、

聞いてどうやら気にかゝる、お弓は猶も傍に寄り「ム、父様や母様に逢いたさに、西国するとはどうした訳ぢや、サそれが聞きたい、言うて聞か

しや／＼」「アイ、どうした訳ぢや知らぬが、三つの年に父様や母様も、わしを婆様に預けて、どこへやら往かしやんしたげな。それでわたしは婆様の世話になつていたけれど、どうぞ父様や母様に逢いたい、顔が見たい。それで方々と、尋ねて歩くのでござります」「ム、シテその親達の名は何というぞいの」

「アイ、父様の名は十郎兵衛、母様はお弓と申します」と、聞いてびつくり

「ア、コレ／＼、アノ父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、婆様に育てられていたとは、疑いもない我が娘」と、見れば見る程幼顔、見覚えのある額のほくら

「ヤレ我子か、懐しや」と言わんとせしが、待て暫し

「オ、それはマア／＼年端も行かぬに遙々の所を、よう尋ねに出さしやつたのう。その親達が聞いてなら、さぞ嬉しうて／＼飛立つ、サア、飛立つ様にあらうが、儘ならぬが世の憂きふし。身に

も命にもかへて、可愛い子を振り捨て、国を立退く親御の心。よくよくの事であらう程に、酷い親と必ずく恨みぬがよいぞや」「イエく、恋しい父様や母様、たとへいつ迄かゝつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやてゝ、何処の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては、た、た、叩かれたり。怖い事や悲しい事も、父様や母様と一所にいたりや、こんな目には逢うまい物を、何処にどうしてゐやんすぞ。逢いたい事ぢやく逢いたい」と、わつと泣き出す娘より、見る母親はたまり兼ね

「才、道理ぢや、可愛や、いじらしや」と、我を忘れて抱き付き、前後正体嘆きしが

「才、段々の様子を聞き、我が身の様に思はれて、悲しいとも情ないとも、言うに言はれぬ事ながら、兎角命が物種。まめでさへいりや、又逢われまいものでもない。コレ、何ぼ一人旅でも、たとと銭さへやりや泊める。わづかなれども志、この金を

路銀にして、早う国へ去にや、ヤ、必ずく煩うてばしたもんな」と、金を渡せば押し戻し

「アイ、嬉しうござんすれど、金は小判という物を、たとと持つてをります。そんなりやまうさんじます、忝のうござります」と、泣くく立つを引きとどめ、無理に持たして塵打ち払い

「コレ、もう去にやるか、名残りが惜しい、別れとむない、コレ、今一度顔を」と引き寄せて、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思い、それと知らねど誠の血筋、名残り惜げに振り返り

「どこをどうして尋ねたら、父様や母様に、逢われる事ぞ、逢わしてたべ、南無大悲の観音様」

泣くく別れ行く跡を、見送りく延び上り

「コレ娘、ま一度こちら向いてたもくいの。折角長の海山越え、艱難してあこがれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢いは逢いながら、名乗らで去なす母が気は、どの様にあらうと思ふ、狂気半分、半分は死んでゐるわいの。まだ生い先のある子をば、親故路頭に立たすか」と、その儘そこにどう

と伏し、消え入るばかり嘆きしが、起き直つて涙を押え

「イヤ〜、どう思い諦めても、今別れては又逢う事はならぬ身の上、たとへ難儀がかゝらばかれ、又その時は夫の思案、程は行くまい追付いて、連れて戻らう。オ、さうじゃ、〜」と子に迷う、道は親子の別れ道、後を慕うて

つばさかかんのんれいげんき さわいちうち
壺坂観音靈驗記 沢市内より山の段

夢が浮世か浮世が夢か、夢ちよう里に住みながら、住めば住むなる世の中に、よしあし曳きの大和路や、壺坂の片辺り土佐町に、沢市という座頭あり、生れついたる正直の、琴の稽古や三味線の、糸より細き身代の、薄き煙の営みに、妻のお里は健やかに、夫の手助け賃仕事、つゞれさせちよう洗濯や、糊かいものを打盤の、音もかすかの暮らしなり

〜鳥の声、鐘の音さえ身にしみて、思い出すほど涙が先へ、落ちて流るゝ妹背の川を

「オ、これは〜沢市様。今日は何と思うてやら、三味線出して、よい機嫌じゃの、オホ、〜」

「オ、お里か、そなたアノおれが三味線弾くを、よい機嫌に見ゆるかや」「アイナア」「ハテナア俺やそんな気じゃないはいの。モウ〜〜〜気が詰まつて〜、いつそ死んでも退きよう」「エ、」「イ

ヤサアノ死んでしまうほど、気がふさいでならぬわいのう。イヤコレお里、わしゃそなたにちと尋ねたいことがある。マア／＼こゝへおじゃ／＼、ハテマアここへおじやいのう。ほかの事でもないが、いつぞは聞こう／＼、と思うていたが、ちようど幸い、光陰矢の如しとやら、月日のたつは、ア、早いものな。ソレわが身と俺が、こゝう一緒になつてからもう三年、幼い時より許嫁、互いに心も知つてゐるに、マなぜそのように隠しやるぞ。さつぱりと打ち明けて、言うてたも」と、どこやら濁る言葉の端。お里はさらに合点いかず、不審ながらに

「コレ沢市様、ソリヤお前何を言わしやんす。嫁入りしてから三年の間、ほんに／＼露ほども、隠し立てした事はござんせぬ。それとも何ぞまた、お氣に入らぬ事あらば、言うて聞かして下さんせ。サそれが夫婦じゃないかいな」「ム、そう言やればこつちも言おう」「オ、何なりとも言わしやんせ」「オ、言わいでか。コリヤお里、マよう聞けよ。

われと夫婦になつて丸三年、每晚七つから先、ついに一度もいた事がない。ソリヤもうおれはこのよゝうな盲目、ことにえらい瘡瘡で、見る影もない顔形。どうでわれの氣に入らぬは無理ならねど、ほかに思う男があらば、さつぱりと打ち明けて、言うてくれたらこのように、何の腹を立ちようぞい。もつともわれと俺とは従兄妹同士。もつぱら人の噂にも、アノお里は美しい／＼と、聞く度ごとに俺はもう、ようあきらめてゐるほどに、愠氣は決してせぬぞや。コレ、どうぞ明かして言うてたも」と、立派に言えど目に漏るゝ、涙呑み込む盲目の、心の内ぞ切なけれ

聞くにお里は身も世もあられず、すがりついて、「エ、ソリヤ胴欲な沢市様。いかに賤しい私じやとて、現在お前を振り捨てゝ、ほかに男を持つよゝうな、そんな女子と申うてか、ソリヤ聞こえぬ／＼、エ、聞こえませぬわいな。モ父様や母様に別れてから、伯父様のお世話になり、お前と一緒に育てられ、三つ違いの兄さんと、言うて暮してい

るうちに、情けなやこなさんは、生まれもつかぬ
疱瘡で、目かいの見えぬその上に、貧苦にせまれ
ど何のその、いったん殿御の沢市様。たとえ火の
中、水の底、未来までも夫婦じゃと、思うばかり
かコレ申し、お前のお目を治さんと、この壺坂の
観音様へ、明けの七つの鐘を聞き、そつと抜け出
でただ一人、山路いとわず三年越し。切なる願ひ
にご利生の、ないとはいかなる報いぞや。観音様
も聞こえぬと、今も今とて恨んでいた。私の心も
知らずして、ほかに男があるように、今のお前の
一言が、私は腹が立つわいの」と、口説き立てた
る貞節の、涙の色ぞ誠なり

初めて聞きし妻の誠。今さら何と沢市が、詫びの
言葉も涙声

「ア、コレ女房どの、何にも言わぬ、堪忍してた
も。謝ったく、謝ったわいのう。モウそうとは
知らず、不具のくせに愚痴ばかり。コレ堪えてた
もれ」とばかりにて、手を合わたる詫び涙、袖
や袂を浸すらん

「ア、コレ、連れ添う女房になんの詫び。お前の
疑い晴れたれば、私や死んでも本望じゃ、私や死
んでも本望じゃわいな」「イヤモウそう言うてた
もるほど、わが身の手前、面目ないわいのう。ガ
それほどにまで信心したもつても、俺がこの目
はコレ、マ治りはせぬわいの」「エ、ソリヤマア何
を言わしやんすぞいな。この年月の憂き艱難。雨
の夜、雪の夜、霜の夜も、厭はぬ私が裸足参りも、
みんなお前のためじゃぞえ」「サアそれほど祈
誓をかけ、願うてたもつた志、ありがたいても嬉
しいとも、その貞節なそなたをば、この年月の回
り根性。観音様じゃと言うたとて、罰こそ当たれ
何のマア、この目が明いてたまるものか」「エ、な
んのいな。私の身体はコレイナアコレ、お前の身
体も同じ事。そんな愚痴を言おうより、ちゃつと
心を取り直し、観音様へともどもにお頼み申して
下さんせ、く」

と、夫を思う貞心の、心遣いぞ哀れなり
沢市涙にくれながら

「オ、過分なぞや女房ども。そうそなたが一心の、据わった上はみ仏の、枯れたる木にも花が咲くとやら、見えぬこの目は枯れたる木。ア、どうぞ花が咲かしたいな、と云うたところが、罪の深いこの身の上。せめて未来を」「エ、」「イヤサアノ女房ども、手を引いてたも、いざ／＼」

と、言うに嬉しく女房が、身拵えさせそこ／＼に、いたわり渡す細杖の、細き心も細からぬ、誓いは深き壺坂の、御寺をさして

辿り行く。伝え聞く壺坂の觀世音は人皇五十代、桓武天皇奈良の都にまします時、御眼病甚しくこの壺坂の尊像へ、時の方丈道喜上人、一百七日のご祈禱にて、たちまち平癒あらせられ、今にいたつて西国の六番の札所とは、皆人々の知るところ、げにありがたき靈地なり

折しも坂の下よりも、詠歌を道のしおりにて、沢市夫婦よう／＼と、御寺間近く詣で来て、「コレ沢市様。信心は大事なれど、病は氣からと

言うからは、お前のようにしお／＼と、ふさいでばかりいやしやんと、なお病いは重ならう。コレこんな時にはわつさりと、日頃覚えの唄なりと氣晴らしに唄わんしたらどうじゃの」「オ、ほんにそうじゃの。わが身の言やる通り、くよ／＼思ふは目の毒じゃ。そんならアノ、浚えと思つてやつて退きよう。しかし、誰も見ていやせぬかや。エ、まゝよ、てつぽのかわ、やつて退きよう。エ、／＼、憂きが情けか情けが憂きか、チンツン、チンツツチンツン、露と消えゆく、テチン、わが身の上は、チンチンチン、チリンツテチリツテントンシヤン、アイタ／＼、アしもた、今けつまづいて後の合の手、皆忘れてしもうた。アハ、／＼、」「オホ、／＼、」と、唄をしばしの道草に、ご本堂へと登り来て

「サア／＼沢市様。ソレ觀音様へ来たわいな」「ハアもうこゝが觀音様か、ヤレ／＼ありがたや、ありがたや。ハア南無阿弥陀仏／＼／＼」「コレ／＼こちの人、今宵こそゆつくりと、ご詠歌を夜もす

がら、上げましようではあるまいか」

と夫婦して、唱ふる詠歌の声澄みて、いとしん／＼と殊勝なれ

へ岩を建て、水をたゝえて壺坂の

「コレお里、叶わぬ事とは思えども、そなたの言葉に従うて、来ごとは来てもなかく／＼に、この目は治りそうな事はないわいのう」「エ、この人はいのう。またしても、／＼そんな事、モとかく信心というものは、気を長う歩みを運んで、心を鎮め一心におすがり申せば何事も、叶えてやるとのお慈悲じゃわいのう。モそんな事言う手間で、早うお唱え申しませう」と力を付くれば

「いかさまのう。ほんに言やればその通り、そんならわしは今宵から、三日の間こゝに断食するほどに、そなたは早う内へ去んで、何かの用事仕舞うておじゃ。治るとも治らぬとも、この三日の間が運定め」「オ、よう言うて下さんした。そんなら私も内へ帰り、何かの用事片付けてきませう。ガコレ沢市様、このお山は険しい山道、ことに坂

を登りて右へ行けば、幾何丈とも知れぬ谷間じやほどに、コレ構えてどっこへも」「オ、どこへ行こうぞ。今夜から観音様と首引きじや、アハ、ハ、ハ」「オホ、ハ、ハ」と、笑ひながらに女房が、跡に心は置く露の、散りてはかなき別れとも、知らでとつかは急ぎ行く。

跡に沢市たゞ一人、堪えし胸のやるせなく、かっぱと伏して泣きいたる

「コレ嬉しいぞや、女房ども。この年月の介抱その上に、貧苦に迫るも厭いなく、ただの一度も愛想尽かさず、あまつさえ、目かいの見えぬこの身をば大事にかけてたもる志。それとも知らず色々の疑いだて、コレ、堪忍してたも／＼。今別れてはいつの世に、また逢う事のあるべきか、不憫の者やいじらしや」と、大地にどうと身を打ち伏し、前後不覚に歎きしがやう／＼に顔を上げ

「ア、歎くまい／＼。三年が間女房が、信心こらして願うても、何の利益もないものを、いつまで

生きても詮ないこの身、世のことわざにも言う通り、退けば長者が二人のたとえ、わしが死ぬのがそなたへ返礼。生き永らえていずれへなりと、よき縁付きをしてたもヤ、ム、最前聞けば、坂を登りて右へ行けば、幾何丈とも知れぬ谷間との事。これ 究竟くつきょうの最期所。かゝる靈地の土となれば、未来は助かる事もあらん

ム、幸いに夜は更けたり。人なきうちに、オ、ソウじゃ〜と立ち上がり、乱るゝ心取り直し上る段さえ四つ五つ、早や更け渡る鐘の声。

「イザ最期時、急がんと、杖を力に盲目の、探り〜とよう〜と、こなたの岩にかけ上がれば、いと物凄き谷水の、流れの音もどう〜と、響くは弥陀の迎いぞと、杖を傍に突き立て、」南無阿弥陀仏」ともろともに、がはと飛び込む身の果ては、哀れなりける次第なり

かゝる事とも露知らず、息せき道より女房が、とつて返すも気はそぞろ、常に馴れにし山道も、滑

り落つやら転ぶやら、よう〜登る坂の上

「ヤアコリヤコレ、こちの人が見えぬわいな。沢市様、沢市様のう〜」

と、尋ね回れど声だにも、人影さえも見えざれば、あなたへうろ〜こなたへ走り

「沢市様のう〜」とこゝかしこ、木の間を渡るゝ月影に、透かせば何か物ありと、立ち寄り見れば覚えの杖。「ハッ」と驚きはるかなる、谷を見れば照る月の、光にわかつ夫の死骸、

「ハア、コリヤマアどうしよう、悲しや」と、狂気の如く身を悶え、飛び降りんにも翅なく、呼べど叫べどその甲斐も、答うるものは山彦の、こだまよりほかなかりける

「エ、こちの人、聞こえませぬ〜、聞こえませぬわいな。この年月の艱難も、厭わぬ私が辛抱はな、たゞ一筋に観音様へ願込めて、どうぞ早う目の明きますよう、お助けなされて下されと、祈らぬ間とてないものを、今日に限ってこのしだら、跡に残つて私やマア、どうなるぞいな、どうしよ

う／＼、どうしようぞいな。ア、これを思えば最前に、唄わしゃんしたあの唄は、どうやら心にかゝったが、今で思えばその時に、死ぬる覚悟であつたのか、知らなんだ／＼。こういふことなら何のマア、お前を無理に連れて来ましよう。コレ堪忍して下さい／＼、エ、／＼。ほんに思えばこの身ほど、はかない者があるかいな。二世と契りしわが夫に、永い別れとなる事は、神ならぬ身の浅ましや。かゝる憂き目は前の世の報いか罪か、エ、情けなや。この世も見えぬ盲目の闇より闇の死出の旅。誰が手引きをしてくりよう。迷わしやるのを見るようで、いとしいわいの」とかき口説き口説き立て／＼、嘆く涙は壺坂の、谷間の水や増さるらん

やう／＼涙の顔を上げ

「ア、悔やむまい、歎くまい。皆何事も前の世の、定まり事とあきらめて、夫とともに死出の旅。急ぐは形見のこの杖を、渡すはこの世を去りて行く、行く先導き給えや、南無阿弥陀仏」弥陀仏の、声

もろともに谷間へ、落ちてはかなき身の最期、貞女のほどこそ哀れなり

頃は如月中空や、早や明け近き雲間より、さつと輝く光明に、連れて聞こゆる音楽の、音も妙なるその中に、いとも気高き上藹の、姿を仮に観世音、微妙の御声うるはしく

「いかに沢市うけたまわれ。汝、前世の業により盲目となつたり。しかも兩人ながら、今日に迫る命なれども、妻の貞心、または日頃念ずる功德にて、寿命を延ばし与うべし。この上はいよく信心渴仰して、三十三所を順礼なし、仏恩報謝なし奉れ。コリヤ、お里お里、沢市／＼」

と、宣う御声もろともに、かき消す如く失せ給へば、早や晨朝の鐘の聲、四方に響きて明け行く空。ほのぼの暗き谷間には、夢とも分かぬ二人とも、むつくと起きて

「ヤこなたは沢市様。ア、コレ／＼こちの人、お前の目が明いてあるがな」「エ、オ、ほんにコリヤ目が明いた。オ、目が明いた／＼」。チエ、

観音様のおかげ。ありがとうござります

く。ム、そしてアノ、お前はマアどなたじゃえ
「どなたとはなんぞいの。コレ私はお前の女房じ
やわいな」「エ、アノお前がわしの女房かえ。コレ
ハシタリ、初めてお目にかゝります、ハ、ハ、ハ、ハ、
ア、嬉しや。それに付けても不思議な事。正
しくわしは谷へ落ち、死んだと思うて何にも知ら
ぬその中に、観音様がお出でなされ、前生からの
事、こまこまと御知らせ」「サイナア私もお前の跡
を追い、谷へ落ちたに違いはない。ガ身内につ
も傷つかず、その上お前のお目は明く、コリヤマ
ア夢ではないかいな」「ム、そんなら今、沢市く
とおっしゃったが、コリヤ観音様がじきくんに、
お呼び生け下されましたに違いはない。ハ、ハ、ハ、
ありがたや忝や。これよりすぐにお礼参りは浮木
の亀、初めて拝む日の光は、年立ち返る心地ぞや」
これぞ誠に観音の、御利生ありけるや。見えぬ目
も見え明らかに、ありがたかりける新玉の、年立
ち返る如くにて、水も漏らさぬ夫婦の命も助かり

けるは、誠にめでとう候いける。今日は嬉しや、
杖を納めて折しも朝の、日の目を拝んでお礼申す
や神や仏、よろず見せ給うはこれひとへに観世音、
これひとえに観音の誓いの重きは岩を建て、水を
たゝえて壺坂の庭の砂も浄土なるらん御示し、あ
りがたかりける御法なり

本朝 廿四孝 奥庭狐火の段

思いにや、焦がれて燃ゆる野辺の狐火、小夜更けて。狐火や狐火、野辺の野辺の狐火、小夜更けて

「アレあの奥の間で検校が諷う唱歌も今身の上。おいとしいは勝頼様。かゝる企みのあるぞとも知らずはからぬお身の上。別れとなるもつれない父上。諫めても嘆いても聞き入れもなき胸慾心娘不憫と思すなら、お命助けて添はせてたべ」と、身を打ち伏して嘆きしが

「イヤ〜泣いてはいられぬところ。追手の者より先へ廻り、勝頼様にこの事をお知らせ申すが近道の、諏訪の湖舟人に渡り頼まん、急がん」と、小褻取る手もかいがいしく駆け出だせしが
「イヤ〜」。今湖に氷張り詰め船の往来も叶はぬ由。歩路を行ては女の足、なんと追手に追つかりよう。知らすにも知らされず、みす

「夫を見殺しにするはいかなる身の因果。ア、翼が欲しい、羽根が欲しい。飛んで行きたい、知らせたい。逢いたい、見たい」と夫恋いの、千々に乱るゝ憂き思い

「千年百年泣き明かし、涙に命絶ゆればとて夫の為にはよもなるまじ。この上頼むは神仏」と、床に祭りし法性の兜の前に手をつかえ

「この御兜は諏訪明神より武田家へ授け給わる御宝なれば、とりも直さず諏訪の御神。勝頼様の今の御難儀、助け給え、救い給え」と兜を取つて押し頂き〜し佛の、もしやは人の咎めんと窺い降りる飛石伝い、庭の溜りの泉水に、映る月影怪しき姿。『ハツ』と驚き飛び退きしが

「今のは確かに狐の姿。この泉水に映りしは、ハテ面妖な」と、どきつく胸撫で下ろし〜、怖々ながらそろ〜と、差し覗く池水に、映るは己が影ばかり

「たった今この水に、映ったは狐の姿。今また見ればわが佛。幻というものか、たゞし迷いの空目

とやらか。ハテ怪しや」とつおいつ、兜をそつと手に捧げ、覗けばまたも白狐の形、水にあり、有明月、不思議に胸も濁り江の池の汀にすつくりと眺め入つて立つたりしが

「誠や、当国諏訪明神は狐を以て使わしめと聞きつるが、明神の神体に等しき兜なれば、八百八狐付き添いて、守護する奇瑞に疑いなし。オ、それよ思ひ出したり。湖に氷張り詰むれば渡り初めする神の狐、その足跡を知る辺にて心易う行き交う人馬、狐渡らぬその先に渡れば水に溺るゝとは、人も知つたる諏訪の湖。たとえ狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に神の力の加わる兜、勝頼様に返せとある諏訪明神の御教え。ハハア、ハ、ハ、ハ、忝なやありがたや」と兜を取つて頭にかづけば、たちまち姿狐火のこゝに燃え立ちかしこにも、乱るゝ姿は法性の、兜を守護する不思議のありさま諏訪の湖かち渡り、早やしのめと明け渡る、甲斐と越後の両将とその名を今に残しける